

## エレミヤ書2章13節 「二つの悪」

### 1A 泉を捨てる事

1B 湧き水なる神

2B 初めの愛

3B 空しさへの従順

### 2A 壊れた水溜

1B 澱む水

2B 掘っても溜まらない水

3B 徐々に無くなる水

## 本文

私たちの聖書通読の学びは、今日からエレミヤ書に入ります。午後礼拝において3章の始めの部分まで触れたいと思いますが、今朝は2章13節に注目したいと思います。「わたしの民は二つの悪を行なった。湧き水の泉であるわたしを捨てて、多くの水ためを、水をためることのできない、こわれた水ためを、自分たちのために掘ったのだ。」

私たちはこれまでイザヤ書を見てきましたが、エレミヤ書はその大体、百年後に預言されたものです。イザヤの時にはヒゼキヤがユダの王であり、彼の死んだ後にマナセが王となり、彼の55年間の治世がユダの国の運命を決定的なものとなりました。彼はヒゼキヤの宗教改革を全て打ちこわし、周りの住民の偶像を取り入れて、全ての住民に偶像を拝むように強いらせました。そして、生まれてくる赤ん坊を、火の中を通してそれらの神々に捧げさせたのです。このような墮落のために、ユダは滅びるしかありませんでした。エレミヤは、ユダが滅びていくのだという神の言葉を語る使命を受けた預言者です。

皆さんがもし、自分の愛する人が癌によって死ななければいけないことを知って、それでもそのそばに付いて、克明にその死んでいくまでを記録していくように命令されたら、どうでしょうか？もちろん涙なしには、書き記すことはできません。時には、僅かな希望を見いだしたいと願うことでしょう。少しでも体調が良くなった兆しがあれば、これで回復するのではないかと願いでしょう。しかし医者は既に伝えていますが、彼の余命は非常に短いと。ユダの国は、霊的な死に至る病、つまり神に対する罪の中にいました。そして、その罪によって国が死んでいってしまうことを、本人たちに語っていかねばなりません。彼の目はいつも腫れぼったくなくなっていました、涙を流さないで預言しなかったと言われており、嘆きの預言者と呼ばれています。

先ほど読んだ箇所は、彼らの犯していた悪を端的に神が告げておられる箇所です。二つの悪を行なったと言われていています。一つは、「湧き水の泉であるわたしを捨て」たという悪です。もう一つ

は、「**多くの水ためを、水をためることのできない、こわれた水ためを、自分たちのために掘った**」という悪です。

### 1A 泉を捨てる事

聖書では、私たちが生きるための渴望を、水を飲むことに喩えています。私たちは、この肉体を生かすための根本的な欲求がありますね。空気を吸う欲求です。これは言うまでもないことでしょうが、しかし私たちはその恵みとありがたさをしばしば忘れていきます。そして、もう一つの根本的な欲求は水です。これもまた、そのありがたさはあまり意識することはないでしょう。特に、日本は世界で最も水の供給が安定している国の一つですから、水の貴さに実感が最も湧かない民族かもしれません。聞いたことがあるのは、ヨーロッパでホームステイさせてもらった日本人が、毎日、お風呂に入って、大変なことになったということです。それは言わば、夏に二週間の旅行に行った時に冷房をずっとつけっぱなしだったような費用だと考えればよいでしょう。

中東地域は違います。今年二月に、聖書の舞台であるイスラエルとヨルダン旅行に行ってきました。一年の8か月ぐらいは雨の降らない地域です。ですから、水の保全にはものすごい力を入れています。まるで、水を手ですくって、それが漏れないように一生懸命頑張っているというような印象を抱きます。水が希少なのです。

そこで、当時の聖書時代の遺跡を見ると、二つのことを発見するのです。一つは、町の遺跡です。城塞がどこにあったのかと言いますと、必ず水源のあるところに建てられています。地下水あるいは泉が湧き出ているところに、城壁の跡があります。エルサレムは、ギホンの泉という泉があったので、そこに町が建てられました。けれども、もう一つの遺跡は貯水槽です。これが数多くあります。水がほとんど降らない時でも、雨季に降った雨水を集めて、貯水します。イスラエルは岩だらけなので、そこで岩を掘って、そこに水が溜まるようにしています。イスラエルの至る所に、当時の貯水槽の遺跡が見つかるのです。ところが、問題があります。岩を掘っていったら、なんと裂け目ができていた時です。水を溜めても、少しずつその裂け目から流れ出てしまうので役に立ちません。せっかくそこまで掘ったのですが、その時はあきらめて、そこをお墓にします。イスラエルでは、岩を掘ったところを墓にしています。

それでこの喩えがあるのです。二つの悪だと言っていますが、一つは神があなたを生かす湧き水の泉であるのに、あなたは神を捨てた。そしてもう一つは、水溜の水を飲んでいて、しかも裂け目があって用をなさない壊れた水溜から水を飲んでいる、と言っています。

### 1B 湧き水なる神

私たちに、この肉体を生かすために空気への欲求があり、また水への欲求があると話しましたが、人間には神への欲求があります。自分が単に、食べて飲んで、この肉体が生きているだけが生きているのではない、それ以上の何かがあると求めている、もっと高次元の命です。これを聖

書では、霊的な命、また永遠の命と呼びます。なぜ自分が生まれてきたのか、今、生きている意味は何なのか、そして死んだ後に自分はどうなるのか？こうした根本への問いかけに真正面から答えてくれるものが、霊の命、永遠の命です。人は、こうした自分に生きる意味を与える何かに枯渇していて、聖書は、それを持続的に、いや永続的に与えてくださるのが、神であり、神の子イエス・キリストであると教えています。

ですから、すべての人が神を持っています。自分は何かをあがめ、何かを礼拝しています。それは、多くの場合、神社やお寺ではありません。それらは習慣であり、また家の制度であり、自分がそれで生かされているとは、思っていません。もっともっと、日々の生活がこれによって成り立っているのだという根底にあるものです。普段は、先ほどから話しているように空気のようになっているかもしれません。蛇口をひねれば出てくる水のようになっているかもしれません。けれども、ひとたびそれが取り除かれると、自分はそれがなければ生きていけないと気が狂うように慌ててしまうもの、そうしたかけがえのないものが、自分にとっての神です。

ある方が最近、ご自身がイエス様に出会った体験、証しをしてくださいました。ご自身の夫がなくなって、読むことも書くこともできなくなった。けれども、「心の貧しい者は幸いです。天の御国はその人のものだからです。」というイエス様の言葉を知った。今の、私にとっての夫はイエス様であり、イエス様が守ってくださっているという証しです。

聖書にはサマリヤの女の話が出てきます。サマリヤという所に、昼間に一人の女が、井戸から水を汲みに水瓶を持ってやって来ました。イエス様はそこにおいて、女から水をくださいとお願いしました。けれども、それは話のきっかけであり、イエス様は物理的な水ではなく、霊的な命、永遠の命のことを話したくて、このように言われました。「…あなたに水を飲ませてくれと言う者がだれであるかを知っていたなら、あなたのほうでその人に求めたことでしょう。そしてその人はあなたに生ける水を与えたことでしょう。(ヨハネ 4:10)」けれども、この女はその井戸の水を語っているのだと思っていました。それでイエス様はこう言われました。「4:13-14 この水を飲む者はだれでも、また渴きます。しかし、わたしが与える水を飲む者はだれでも、決して渴くことはありません。わたしが与える水は、その人のうちで泉となり、永遠のいのちへの水がわき出ます。」そうです、イエス様を知ることが泉のようであり、この方からは絶えず、いつまでも、そして永久まで流れる命を与えるとされているのです。

ところが、彼女はまだその意味を介していません。そこでイエス様は、話題を変えられます。「行って、あなたの夫をここに呼んで来なさい。」しかし彼女は、「私に夫はありません。」と言いました。そしてイエス様は核心に迫ります。「4:17-18 私には夫がないというのは、もっともです。あなたには夫が五人あったが、今あなたといっしょにいるのは、あなたの夫ではないからです。あなたが言ったことはほんとうです。」そうです、彼女は自分の生きがいをも男に置いていたのです。彼女にとっての水は、男であって、自分が生きていることを証明する生きがいを、男との関係に求めていまし

た。けれども、物理的な水を飲んでもまた渇くように、彼女の渇きは満たされませんでした。それで五人の夫がいましたが、今は結婚にさえ失望し、同棲している状態だったのです。

イエス様は仮庵の祭りの日に、こう言われました。「7:37-38 だれでも渇いているなら、わたしのもどに来て飲みなさい。わたしを信じる者は、聖書が言っているとおり、その人の心の奥底から、生ける水の川が流れ出るようになる。」またこの水を、ただで飲みなさいと言われました。「渇く者は来なさい。いのちの水がほしい者は、それをただで受けなさい。(黙示 22:17)」

## 2B 初めの愛

みなさんにとっての神は誰でしょうか？自分が、これがなければやっていけない、と思うものは何でしょうか？イスラエルの民は、幸いな人々でした。なぜなら、初めからまことの神、天地を造られた神に見出されていたからです。エレミヤ 2 章 2 節にこう書いてあります。「わたしは、あなたの若かったころの誠実、婚約時代の愛、荒野の種も蒔かれていない地でのわたしへの従順を覚えている。」イスラエルの民は、エジプトから出て、荒野の旅をしていました。そこは沙漠ですから、食べる物も、飲む物も全くありませんでした。けれども、主が岩から水を出してくださり、また天からマナという食べ物を下さいました。自分たちが生きているのは、確かに天地を造られ、全てを支配している神であることを実体験できました。それを主は、「若かったころの誠実、婚約時代の愛」と呼んでいます。

けれども、私たち人間もそうなのです。私たちは裸で生まれ、そして死ぬ時は裸で帰ります。その間に持っている物は、すべて一時的です。ですから、私たちにとって最も大切なのは、この命を支えている方、天地を造られた神ご自身です。そして聖書は、この神は人格を持っておられ、実に私たちを愛してくださっていると教えています。そして、神が人となり、その方がイエス・キリストであると教えています。ですから、自分の命にとって最も根本的な、永続する愛を与えるのは、神とキリストであります。

## 3B 空しさへの従順

ところが、人間というのはその後、いろいろな添加物が尽きます。本当は食べなければいけないもの、栄養価のものがあるのは、パンであれば小麦粉なのですが、その表面についている添加物が自分を生かしていると思込みます。植物性の着色料の部分が鮮やかなので、それだけを食べていたらどうなるのでしょうか？死にますね。けれども、私たちはそれを人生の中で行ってしまふのです。自分の見た目が生きている証拠であると思込みます。自分の学業、自分の容姿、また自分の財産、あるいは世間体、これらのものに命をかけるのです。そして、まるで自分がこの世に生まれてきて、なおのことこの命を支え、そしていつか、この命を取り上げる神ご自身には目を向けないのです。神こそが命を与えるのに、添加物で生きようとします。

それを主は、「むなしいもの」と呼ばれています。「エレミヤ 2:5 あなたがたの先祖は、わたしにど

んな不正を見つけて、わたしから遠く離れ、むなしいものに従って行って、むなしいものとなったのか。」天地を造られた神ではない、神々と呼ばれているものは、当時はそうした添加物こそに命があると偽りの広告を出しているものでした。例えばマモンという神がいて、富の神でした。金さえもっていれば幸せになれると教えていました。バアルという力の神がいました。権力や力を持っていれば、自分を満たせると教えていました。アシュタロテという女神がいました。性愛の神です、ですからセックスを貪るように教えていました。そして、ケモシュという神もいましたが、快樂の神です。自分の趣味、遊び、グルメ、スポーツ、こうしたものだけで自分を満たそうとさせる神です。これらは、みな空しいものなのです。

## 2A 壊れた水溜

しかし、イスラエル人は、湧き水の出す泉を捨ててしまいました。これが一つ目の悪です。もう一つの悪は、「壊れた水溜を掘っている」ことです。

### 1B 澱む水

今、ずっと話してきたように、まことの神ではないものを生きがいにしていくということは、湧き水ではなく澱んだ水を飲むことになります。泉からの湧き水は、絶えず新しくされます。パウロは、「たとい私たちの外なる人は衰えても、内なる人は日々新たにされています。(2コリント 4:16)」と言いました。クリスチャンの醍醐味は、年を取っても、かえって若返るということです。イエス様にますます近づき、そしてイエス様にお会いできる日が近づいていることを知って、ますます希望を抱くことができます。外なる人は確実に衰えているのですが、内なる人は日々新たにされています。

ところが、まことの神ではないところに生きがい求めてきた人は、年を経るにつれて「何の喜びもない」と言うようになり、暗くなり、ついに肉体が減びることをソロモンという人が教えています。「伝道者 12:6-7 こうしてついに、銀のひもは切れ、金の器は打ち砕かれ、水がめは泉のかたわらで砕かれ、滑車が井戸のそばでこわされる。ちりはもとあった地に帰り、霊はこれを下さった神に帰る。」

### 2B 掘っても溜まらない水

そして、しかも水が澱むだけでなく、裂け目ができているので、水が少しずつ出ていって、溜まっていないのです。自分がこれだけのものを成し遂げた、と思いきや、そこに不足を感じます。欲すれば欲するほど、自分に不足を感じます。せっかく溜まったのに、あれれ、なぜか自分を満たしていないことに気づきます。それで、いつまでも、いつまでも、渇きが残っています。事業に着手していたソロモンが、こうつぶやきました。「伝道者 2:11 しかし、私が手がけたあらゆる事業と、そのために私が骨折った労苦とを振り返ってみると、なんと、すべてがむなしいことよ。風を追うようなものだ。日の下には何一つ益になるものはない。」彼は、この後に自分の成果を息子に継がせなければいけませんでした。その息子がこれまでの遺産を台無しにするであろうことは、分かっていました。それで先が見えてしまって、空しくなってしまったのです。貯水槽には裂け目があって、水

が溜まらなかったのです。

### 3B 徐々に無くなる水

そして、水は徐々になくなります。壊れている貯水槽は、すぐには水が無くなりません。けれども、少しずつ無くなっています。これが私たちの人生です。少しずつ無くなっていることに気づいているのに、薄々やがて枯渇することを知っているのに、「今は水があるからいいや。」と言って、先を見ないで生きている姿です。どうでしょうか、今の日本が経済的にそうになっていますね。圧倒的な経済力を未だ誇っており、世界でも決して負けていません。けれども、それは多額のお金が蔵に入っているけれども、少しずつ出してきた、新たにそこに入れているのではないことを知っています。このような感じです。経済的にそうなのですが、霊的にも同じことが起こっています。

これは実験でそうではないことが分かっていますが、けれども例えとしては興味深い話があります。「茹でガエル」の話です。二匹のカエルを用意し、一方は熱湯に入れ、もう一方は緩やかに昇温する冷水に入れます。すると、前者は直ちに飛び跳ね脱出・生存するのに対し、後者は水温の上昇を知覚できずに死亡する。」というものです。突然の水温上昇なら、熱いから気づきます。けれども、徐々に、緩やかに上昇させると、それに慣れてしまい、自分もその温度に合わせていけると思ってしまい、そして気づいた時には跳び上がることができなくなって、茹でダコならず茹でガエルになるという話です。

実際の実験では、きちんとその温められている水からカエルは出ているそうですが、しかし、私たちの罪の生活は、まさに茹でガエルと同じです。自分のしていることが分かりません。自分は罪を犯していても、その重さ、それが死をもたらすものであることに気づいていません。まだ自分は大丈夫だと思っているのです。けれども、その罪の結果が大きくなり、これではいけないと思っていたところが、もう動けなくなっている、取り返しのつかないことになっている、ということが起こっているのです。そして罪から来る報酬は死なのです。元々の貯水槽の喩えならば、水が少しずつ出ていって、最後は水が全くない状態、つまり死に至ります。それは肉体の死のみならず、神から離れていることの死、永遠の死を意味します。死後に神から引き離された、地獄にいるのです。

しかし、主は十字架の上で、「渴く」と言われました。それは、十字架刑によって体が脱水症状になっていただけでなく、霊的に罪を背負っておられたので渴いたのです。ご自身の罪ではなく、私たちの身代わりになった刑罰です。この方から出てくる水は、その血潮によって罪が清められ、そこから出てくるものです。イエス様の身代わりの死によって、罪が赦されます。そして死なれ、墓に葬られたけれども、三日目に甦られました。その新しい命をもって私たちに永遠の命を与えられます。